

シャンティニケトンの岡倉天心

—1902年の英領インドにおけるタゴールとの出会いについて—

外川昌彦

1 はじめに

「アジアは一つなり」の言葉で知られる東洋美術史家の岡倉天心は、1902年1月6日に英領インドの首都カルカッタ（現、コルカタ）を訪れ、約9ヶ月にわたりインド各地の遺跡を探訪するとともに、ラーマクリシュナ教団を率いるヴィヴェーカーナンダやタゴール家との交流を深めた。特に、文学者ロビンドロナト・タクル（以後、タゴールとする）との交流は、これまでも日印文化交流の原点として、両国の交流事業などの様々な機会に言及されてきた。たとえば、インド政府・文化交流評議会は、タゴール生誕150周年に際して、次のように述べている¹。

タゴールは、1913年にアジア人で初めてノーベル賞を受賞した、インドが生み出した最も有名な文化人の1人です。彼は日本にも大変に関心が深く、日本を訪れ、岡倉天心との親交を築きました。

その天心のタゴールとの交流については、これまで日本側の伝記的研究では、堀岡弥寿子や稲賀繁美、岡倉登志などの優れた論考が著わされてきたが、しかし、インドでの交流の具体的な経緯については、1971年の春日井真也による「堀至徳日記」の発掘以降は新たな史料は発見されず、ベンガル語による史料の制約もあり、その検証が待たれていた²。森本達雄の言葉を引用すると、「当代の日本とインドを代表するこれらの二人の思想家の出会いについては、天心の側にもタゴールの側にも正確な記録はなく、初対面の模様を詳細に語るよすがは（ママ）ない」ということになるのである〔森本1993〕。

それに対して、近年のインド側の研究では、特に2011年のタゴール生誕150周年や、2013年のヴィヴェーカーナンダ生誕150周年を切っ掛

けとして、その伝記的研究には様々な進展がみられ、[Banerjee 2003] や [Bharucha 2006]、[Kowshik 2011] などの新たな研究も報告されている。しかし、これまでのインド側の研究では、天心との具体的な交流の経緯に焦点をおく研究は限られており、日本語による史料への制約もあり、その検証は残された課題となっていた。

そこで本稿では、これまで関連付けられることのなかった両者の史料の対比的な検証を通して、これまで空白となっていた日印文化交流史の一側面を明らかにしようとするものである。もとより、当時の関係者による新たな史料の発掘が困難な中で、その明確な全体像を描くことにはなお課題が多いが、近年のインド側での史料研究の進展を踏まえ、また日印間の史料の批判的検証を通して、両者の交流に新たな光を与えようとするものである。

本稿の構成は、以下の通りである。はじめに、天心から見たタゴールへの言及と、タゴールから見た天心への言及を検討する。その中で、これまで課題となっていた、ニベディタを通した米国領事館での歓迎会と両者の出会い、また、それに続くタゴールとの交流の経緯を検証する。特に、創設もないタゴールの学園への天心の訪問の可能性を検証し、それを通して、両者の思想的な交流を跡付けてゆく可能性を明らかにする。

2 天心が見たタゴール

岡倉天心は、日本美術院の経営に行き詰まった 1901 年末に、突如、インドに渡り、カルカッタを中心に、9ヶ月間滞在する。天心のインド渡航のひとつの目的は、1893 年のシカゴ万国宗教会議で一世を風靡したヴィヴェーカーナンダを日本に招聘することにあったが、7月初めのヴィヴェーカーナンダの急逝もあり、その後の天心はタゴール家との親交を深めてゆく。しかし、インド滞在での天心の記録は断片的なものに留まり、日本への書簡などでその片鱗がうかがえるのみとなっている。特に、ヴィヴェーカーナンダと会見した天心が、たちまちその人物の大きさに感銘し、日本に手紙を書いているのとは対照的に、天心のタゴールへの言及は極めて限られており、当時の天心の様子を伝えるシュレンドロやオボニンドロの回想にも、その具体的な言及は見られない³。

しかし、天心は、創設もないシャンティニケトンのタゴールの学園

に、同行した留学僧の堀至徳をサンスクリット語の勉強のために派遣し、帰国後にはタゴールが懇意にしていたトリブラ藩王家の宮殿壁画の作成のために、横山大観と菱田春草をカルカッタに派遣している。また、1903年4月に京都で開催を準備していた東洋宗教会議の招聘者のリストには、タゴールも含まれていた⁴。このような経緯は、両者の間には、当初から一定の信頼関係が築かれていたことをうかがわせるものとなっている。

1902年10月に帰国した天心は、その後は主に甥のシュレンドロを通してタゴール家との交流を継続するが、11年後の1913年のアメリカでは、タゴールが、ボストン美術館の東洋美術部長の天心を訪問するという形で、2人は旧交を温める。英訳した『ギーターンジャリ』のイギリスでの評判に手応えを得たタゴールは、その後、アメリカ各地で講演を行い、2月3日にはボストンを訪れていた。天心は、タゴールを自宅に招くとスキヤキをふるまい、同行の横山大観らに引き合わせるなど、タゴールの滞在を、「できる限り退屈でないものにしたい」と心を配っていた⁵。そのタゴールを見送った天心は、カルカッタのプリヨンボダ・デビに、次のように書き送っていた⁶。

ロビンドロナト様はシカゴに発たれ、私は急に一人ぼっちの思いです。

天心はこの時、すでに腎臓炎の悪化から体調を崩し、ボストン美術館への休職の願いを出していた⁷。3月25日には帰国の途に就き、9月2日に赤倉の別荘で逝去する。11月13日のタゴールのノーベル賞受賞を、天心は知ることはなかったのである。

3 タゴールが見た天心

タゴールによる天心への言及も、残された記録では限定的である。天心と思われる人物について、タゴールが初めて言及したとされるのは、1902年4月16日付のジョゴディシュチョンドロ・ボシュ夫人への、次の手紙である⁸。

もしあなたがたがインドへ帰国する際に、日本に立ち寄ることができるなら、その時に私も日本へ行って、あなた方に会えるように手配してみましょう。ニベディタのおかげで私はある日本人と友人になりました。

シスター・ニベディタは、アイルランド出身で、ヴィヴェーカーナンダの敬虔な弟子であるが、様々な著作活動やカルカッタでの社会活動を通してタゴールとも交流を深めていた。『東洋の理想』に序文を寄稿し、シュレンドロを引き合わせるなど、天心のインドでの活動にも、ニベディタは大きな役割を演じている。このタゴールの手紙は、シュレンドロのように、タゴールもまたニベディタを通して、天心と知遇を得たことを伝えている。日本行きの予定が仄めかされていることも、先述の東洋宗教会議への、天心によるタゴールへの招聘計画に対応する⁹。しかし、この時にはタゴールの来日は実現せず、また、この書簡の「ある日本人」には具体的な名前が言及されていないので、その天心との関係について、これまで十分に検証されることはなかったのである。

その後、1916年に初来日したタゴールは、天心が愛した北茨城の五浦を訪れて故人を偲ぶが、公の場での天心への言及は見られず、最後の来日となった1929年5月の講演で、初めて詳しく語っている¹⁰。天心についての思い出を求められたタゴールは、この日印協会の講演で、次のように述べている¹¹。

幾年か前のことです。わたしは日本の国からきた一人の偉大な独創的な人物に接したときに、真の日本に出会いました。この人は長い間わたしどもの客となり、そのころのベンガルの若い世代に測り知れない靈感を与えました。…彼は昼といわず夜といわず、言葉もよく通じない異国の民の間で働き続けました。このこと自体もまたわたしどもにとって、よい教育でありました。わたしどもはよく連れだって、村の祭りや、町を離れてあちこち訪れたのを覚えています。…わたしは今も憶えています。彼は百姓たちの使う素朴な土焼きの壺というような、全く安価なものを求めては、夢中になり、感嘆するのです。

この最後の来日となった1929年に、タゴールは当時の日本の欧化主義や軍国主義への懸念をいっそう強めていた。この講演では、「真の日本」を体現する天心の視点を通して、それまで明言を避けていた当時の日本の朝鮮半島への、植民地主義的支配の矛盾を鋭く指摘している点は興味深い。日中戦争をめぐる有名な野口米次郎との公開論争は、その9年後の1938年に行われることになるのである。

こうして見てゆくと、タゴールによる天心への言及もまた、限られた記録が残されているだけで、最後の来日となった1929年の講演が、数少ないまとまった言及になっていることが分かる。当事者はそれについて多くを語らず、しかしその後、様々に語られるようになったこの両者の交流について、それでは本稿の射程は、どこまで光を当てることができるだろうか。

4 天心とタゴールの交流の経緯

表は、1902年の英領インドの首都カルカッタを舞台として、岡倉天心とタゴールとが交流を深めてゆく経緯を、これまで明らかになっている史料を通してまとめたものである。その出典から、天心や堀岡などの日本側で知られている史料、タゴール書簡などを通したタゴール家関係の史料、さらにニベディタ書簡などのヴィヴェーカーナンダ側の史料に大別し、対比して並べている。紙幅の都合もあり、この表から本稿では、特にこれまで空白とされてきたタゴールとの出会いに焦点を絞り、次の2点を検証する。すなわち、1 米国領事館での天心とニベディタの歓迎会の経緯、2 それに続くタゴールとの交流の経緯である。

具体的には、1については、日本ではこれまで堀岡が詳しくその経緯を検証しており、特にニベディタと天心との交流については、「天心の渡印以来、ニベディタは『東洋の理想』の原稿の加筆添削に着手」と指摘し、米国領事館でのブル夫人主催の歓迎会を3月7日頃と推定している¹²。これに対して、インド側での詳細な検証を行ったジョンコリプロシャド・ボシュは、両者の出会いを「1902年3月の第一週の終わり頃」と推定する¹³。

次に、2については、日本側の研究では、タゴールと天心との親密な交流が強調されながらも、なかば伝説化された逸話も多く、具体的な検証には欠けていた¹⁴。それに対して、インド側の研究者は、両者の思想

表 岡倉天心とタゴールの交流・抄録（1902年の英領インド）

月日	日本側で知られている事実	Tagore側資料	Vivekananda側資料
1/6	天心、ベルル僧院でVivekanandaと対面し、意気投合(Y)	Tagore, Kolkata より Santiniketan に戻る(K)	天心と堀が到着、ベルル僧院に投宿、MacLeodは米国領事館に投宿(L)
12	芝生の宴席での歓迎会(H)		Vivekanandaの生誕祭
27	天心、VivekanandaとGayaへ(Y)	Tagore, Siraidahへ(K)	天心、VivekanandaとGayaへ(G)
2/6		Nivedita, Kolkataに到着(M)	
7	天心、Sarnath, Ajanta見学へ(Y)		Niveditaによろしくと伝える手紙(V)
12		Tagore, Santiに戻る(K)	
14			Vivekananda「1-2ヶ月後に私は日本に行くだろう」(V)
23			Mahatma Gandhi, 2月2-23日の間に、米国領事館でNiveditaと面会(MG)
3/7	Vivekananda、僧院に戻る(H)		
9	天心とMacLeodが僧院に現れ、米国領事館に戻る(H)	Niveditaは、5月1日まで米国領事館に滞在(N)	MacLeod、Bullが米国領事館に投宿(L)
22	天心とMacLeod、僧院に来る。堀、6pmに米国領事館に行き法話(H)	領事館での歓迎会?, Nivedita天心にSurenを紹介(S, A)	Bull, Nivedita, MacLeodがベルル僧院を訪ねる(L)
24		Tagore, Kolkata へ(K)	
25		Tagore, Bidhan St.へ(K)	
26		Tagore, Surenに連絡(K)	
4/2	織田、Kolkataに到着、天心と僧院でVivekanandaと懇談(H)		織田、天心と僧院でVivekanandaと食事、日本行きを懇請し内諾を得る(L)
9	「午後二時岡倉君他所へ行く」堀は、Vivekananda母宅に(H)	Santiniketanに日本人紳士を招待する手配(K)	MacLeod、Kolkataを出発(L)
11	「午前岡倉君等帰る」(H)		
12		Santiniketanへの2名の日本人紳士の訪問の経費(K)	
16		「Niveditaのおかげで日本人と知合いになった」(T)	
6/13	堀、14時35分Bolpurへ出発、19時35分到着(H)		
10/6	天心、帰国の船に乗る(Y)		
24	7時発、10時ハオラ着(H)		

出典の略号

A: [Abanindranath Tagore 1961]

P: Prasant Kumar Pal, Vol. 5

S: [Surendranath Tagore 1936]

T: Tagore, *Cithipatra*, Vol. 6

V: CWSV, Vol. 9

Y: [岡岡弥寿子 1982]

MG: [Gandhi, M. K. 1966]

G: [Naresh Chandra Ghosh 1989]

H: 「堀至徳日記」[春日井 1971-72]

L: [Life of Swami Vivekananda 1912-2001]

M: *The Indian Mirror* in 1902

N: [Letters of Sister Nivedita, Vol. I 1982]

K: [Sarkari Kyasher Khatiyani Bahi 1308]

的な交流の意義は強調するものの、「堀日記」を超える新たな史料の提示は見られず、その検証作業は限られていた。特に、シャンティニケトンのタゴールの学園での天心との関わりについては、ほとんどの伝記研究者が否定的である¹⁵。たとえば、タゴール国際大学のショウメンドロナト・ボンダパッダエ教授は、「岡倉天心がシャンティニケトンを訪れたという痕跡は残されていない」と述べている¹⁶。

4-1 天心とニベディタの歓迎会

そこで表に従い、はじめにニベディタと天心の動向を見てゆきたい。ニベディタが、オリ・ブル夫人と、イギリスから二度目の来印となるカルカッタに到着した2月6日の欄を見ると、天心はヴィヴェーカーナンダを伴い、ヴァーラーナシーのゴーパッラル・ヴィラに滞在していたことが分かる。ニベディタを歓迎するヴィヴェーカーナンダの書簡は、2月7日にヴァーラーナシーで書かれている。その後、天心は、アジャンターなどのインド遺跡巡りに出発するので、カルカッタに戻るのは3月7日以降となる。しかし、マクラウドへの2月28日の書簡では、すでにニベディタは高揚した筆致で、天心との面会への強い期待をのぞかせている¹⁷。他方、「堀日記」によれば、天心はマクラウドとともに、3月9日以降に米国領事館に滞在しているので、これ以降、天心とニベディタは米国領事館で同宿していたことが分かる¹⁸。

ところで、米国領事館での天心とニベディタの歓迎会の日程については、すでに見たようにシュレンドロらの回想録にも具体的な言及は見られず、日付の確定は困難であったが、「堀日記」の3月22日の項には、次の記述が見られる。

午後5時岡倉及びマ氏来る、午後6時同導亜米領事館へ行きて宿泊、一寸法話。

この記録から、この日の午後、天心はマクラウドをともなってベルル僧院の堀を訪ね、再び堀を同道し、米国領事館に戻ったことが分かる。体調不良の中、天心のブッダ・ガヤ訪問にも同行せずに勉学に勤めていた堀至徳が、他に米国領事館に出向く理由は見当たらないので、堀の「一寸法話」というのは、歓迎会での一場面を指している可能性が高い

ことが分かるだろう。

これを、ヴィヴェーカーナンダ側の資料で見ゆくと、実際にはこの日には、ブル夫人とニベディタ、マクラウドの3人で僧院を訪れており、恐らくは天心を加えた4人でヴィヴェーカーナンダを見舞っていることが分かる。これに先立つ3月16日には、3人はラーマクリシュナ生誕祭に参加するために僧院を訪れているが、その5日後の21日にニベディタは、北カルカッタのクラシック・シアター・ホールで講演会を行っている。

ところで、2月28日のニベディタの書簡によれば、この講演会については、もともと22日の予定であったと記されており、その後の天心との邂逅を経て企画された歓迎会に合わせて、講演会の方を1日早めて行ったことが推測される。通常、懇親会は講演会の後に行われるので、天心とニベディタの歓迎会も講演会の後に設定された可能性が高く、また、日本から来た賓客への歓迎会に際して、天心と同道した堀至徳も招待することは、自然な流れと考えられるのである。

以上の経緯から、米国領事館での天心への歓迎会は、3月22日に開催されたものと推定することができるだろう。

4-2 シャンティニケトンの天心

ところで、この時のタゴールの動向を見ると、表にあるように、3月22日にはタゴールは、まだシャンティニケトンの学園に留まっていた。オボンドロやシュレンドロが天心との印象的な対面の情景を描く歓迎会に、タゴールは出席していなかったのである。すると、「ニベディタのおかげである日本人と友人になりました」という4月16日の書簡は、どのような状況を指すのだろうか。

タゴール側の記録を見てゆくと、歓迎会の2日後の24日に、タゴールはカルカッタに出てきている。創設もない学園の用務に忙殺されていたタゴールがカルカッタに出てくるのは、トリプラ藩王と面会した2月9日以来のひと月半ぶりのことである。そのタイミングから、タゴールもまた、歓迎会で天心の様子を伝え聞いた可能性が高いことが分かるだろう²⁰。恐らくニベディタのみならず、歓迎会で天心に大いに啓発を受けたシュレンドロもまた、その様子をタゴールに伝えたものと考えられる。カルカッタでのタゴールは、24日はヘドゥヤトラ、25日はビダン・

ストリートを訪れ、26日にはバリゴンジのシュレンドロとも連絡を取っているのである。

しかし、より重要なことは、その後のタゴールの天心への対応である。というのも、タゴール側の記録では、2週間後の4月9日には、タゴールが2名の日本人をシャンティニケトンに招待した記録が残されているからである。当時のタゴール家の出納台帳には、以下のような記事を見ることができる²¹。

4月9日（チョイトロ月26日）、1902年（1308 San）

日本人紳士のシャンティニケトン訪問を、シュレンドロ氏に知らせるため、バリゴンジまでの移動のための費用、馬車 3919 番、11 タカ 8 アナ。

4月12日（チョイトロ月29日）、1902年（1308 San）

2名の日本人紳士のシャンティニケトンへの招待の費用の決済。食事等の費用、63 タカ 7 アナ 3 パイ、移動のための列車の費用など、38 タカ 6 アナ。

この記事から、4月9日には、シュレンドロを通して、ある日本人をシャンティニケトンに招待する準備がなされ、12日には、その招待の費用が計上されていることが分かる。すでに見たように、この「2名の日本人」については、やはりその名前が言及されていないので、これまでインド側の研究者による具体的な検証はなされてこなかった²²。しかし、この間の事情を、改めて表の日本側の記録で検証すると、「堀日記」には、次のような記事を見ることができる。

4月9日 午後二時岡倉君他所へ行く、予ハスワミ母宅へ行く。

4月11日 午前岡倉君等帰る、…（僧院に）午後八時半帰る。

すなわち、インド側の記録では、その人物の特定はできないが2名の日本人を招待した費用が計上され、他方で、日本側の記録では、同じ日に天心が2泊3日の旅行に出かけたことが記録されている²³。その行き先が明示されていないので、これまで日本側の研究者が、その経緯について検証することはなかったのである。すなわち、この両者の記録を付

き合わせることで、それがタゴールの招待による天心のシャンティニケトンへの訪問であったと考えて、間違いのないことが分かるだろう。

そこで、改めて日本側の記録を検証してみたい。6月13日の「堀日記」を見ると、シャンティニケトンを初めて訪問した堀は、ハオラ駅を14時35分に出発し、19時35分にボルブル駅に到着したことを記している。カルカッタに戻る翌1月24日には、7時にボルブル駅を出発し、10時にハオラ駅に到着する。これらの記録は、4月9日の14時に他所に出かけた天心が、11日の午前中にはカルカッタに到着するという日程に、対応していることが分かるだろう。

そこで最後に、この間のタゴール側の記録を検証してゆくと、次のような興味深い記事を見ることができる。ベンガル暦の新年の行事に際して行ったシャンティニケトンの学生への講話の中で、タゴールは、「ある学識の高い日本人」に触れると、次のように述べているのである²⁴。

ある学識の高い日本人が言いました。

「君たちも、高いお金を払って外国の道具を取り寄せて、それで大きな商売をしようなど考えないように。我々は、ドイツからある特別な道具を手に入れると、すぐにそれを真似て安い木材で、より入手しやすい簡単な道具を作り、職人たちの家に普及させた。それで作業の効率も上がり、誰もが食べてゆけるようになったのだ」。

このように、機械を単純で簡便なものとし、それを誰もが入手できるようにすることは、東洋の理想なのです。

この講話は4月14日に行われているが、それはタゴールが天心の来訪をもてなした、3日後のことであった。天心の発言に触発されたタゴールが、それがインドにも共有される「東洋の理想」（*pracya adarsha*）であると述べているのは興味深い。この2日後には、「ある日本人と友人になりました」というタゴールの手紙が書かれているのである。

以上の史料が伝えているのは、3月24日以降にタゴールは、ニベディタを介して天心と面識を得て、4月9日には創設もないシャンティニケトンの学園に、天心を招待したという経緯である。シャンティニケトンでの2泊3日の滞在を通して、天心とタゴールがひざを交えて語り合ったという経緯は、その後の両者の活動や思想形成にも、少なからず

影響を与えてゆくものと考えられるだろう。

5 まとめ

本稿で扱った史料はなお限定的ではあるが、天心が、当初の計画であったヴィヴェーカーナンダとの交流から、ニベディタを介したタゴール家との交流へと、その交友関係を広げてゆく経緯を示すものとして位置づけられるだろう。現在では、インド国立タゴール国際大学として発展したシャンティニケトンで学んだ最初の外国人留学生として、日本人の堀至徳が良く知られているが、しかし創設してまだ4ヶ月もたたないタゴールの学園に招待された最初の外国人として、岡倉天心の名前を見ることができるのは、大変に興味深い²⁵。しかし、より重要な問題は、それが両者の交流にどのような意味を持ち、またその後の思想や活動にどのような影響を及ぼしてゆくのか、という点であろう。

しかし、本稿に与えられた紙幅はすでに尽きているので、ここでは日印文化交流史の新たな可能性を指摘するにとどめ、残された問題は、今後の課題とすることができれば幸いである。

付記・本稿の作成にあたり、Rabindra Bhavvana の所長 Topodi Mukhopadhyaya 教授、及び Rabindra Bhavvana 研究員の Sunipa Dev さんには、様々な尽力を頂いた。ここに記して、謝意を表したい。

註

- ¹ Indian Council for Cultural Relation, Letter on Tagore Chair, January 20, 2011。また、西ベンガル州政府がコルカタに建設した日印文化交流の施設は、「タゴール・天心記念館」(Rabindra Okakura Bhavan)と名付けられている。
- ² 紙幅の都合から、そのすべてを挙げることはできないが、たとえば [稲賀 2002, 2005]、[岡倉 2006]、[岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二 2013]、[堀岡 1974, 1982]など。
- ³ 岡倉天心、1980、『岡倉天心全集』第6巻、平凡社、149頁。[Tagore 1936]、[Tagore 1961]。
- ⁴ 「堀日記」7月21日。
- ⁵ [堀岡 1974: 216]。岡倉天心、1981、『岡倉天心全集』第7巻、平凡社、198頁。
- ⁶ 1913年3月3日。岡倉天心、1981、『岡倉天心全集』第7巻、平凡社、206頁。
- ⁷ タゴールは、2月3日にボストンを訪れ21日まで滞在する。タゴールのハーヴァード大学での講演は、後に『サーダナー』として編集される。他方、天心は、2月18日に、唯一のオペラ台

- 本であるThe White Fox を完成、25 日には辞職願を出している。
- ⁸ 16, April, 1902, to Abala Basu, *Cithipatra*, vol. 6, 1993, pp. 82-83.
- ⁹ 天心の東洋宗教会議については、様々な背景が見られるので、稿を改めて論じる必要がある。
- ¹⁰ タゴールが公の場で天心の名前に明言せず、記録の上では何も残していないのは、タゴールがそれに関心を持たなかったからではなく、その政治的影響の大きさから、官憲の目にとまらない様にあえて名前を伏せていた可能性が高いと思われる。しかし、その経緯については、日本での発言も含めて、改めて検証が必要である。
- ¹¹ ラビンドラナート・タゴール、高良とみ（訳）、「東洋文化と日本の使命」、1981、『タゴール著作集』第8巻、第三文明社、489-500 頁。
- ¹² 堀岡弥寿子、1982、『岡倉天心考』、吉川弘文館、72-110 頁。
- ¹³ [Basu NLM 1993: 41-55]。
- ¹⁴ たとえば、革命運動家との交流を含めた天心とタゴールの学園との結び付きを指摘する見解として [春日井 1981: 141-142] があるが、この「伝説」の生成過程については、[野間 1983] が検証している。
- ¹⁵ たとえば、[Bharucha 2006]、[Datta and Robinson 1995]、[Kripalani 1962]、[Mukhopaddhayay 1933-64]、[ボンドパッタエ 1988]、[我妻和男 1981、2006]、[丹羽 2011] など、後述の [Pal 1982-2003] を除けば、主要なタゴールの伝記的研究は、信憑性に欠ける両者の交流の経緯については、言及を避けている。
- ¹⁶ Visva-Bharati University にて、2010 年12 月の筆者とのインタビューから。
- ¹⁷ Nivedita, February 28, 1902, to Miss J. MacLeod, in [Basu 1982: 456-458]。
- ¹⁸ この時に、たまたまインドを訪問していたマハトマ・ガンディーは、ニベディタと米国領事館で面会する。この時のガンディーのカルカッタ滞在が、2 月2 日から23 日なので、この間にニベディタが、米国領事館に滞在していることが分かる [Gandhi 1966]。
- ¹⁹ Nivedita, February 28, 1902, to Miss J. MacLeod, in [Basu 1982: 456-458]。
- ²⁰ 草創期の学園でのタゴールの様子は、[Animananda 1940: 93-96]、[Thakur 1966]、[Tagore 1958]、[Mukhopaddhayay 1961: 42-46]などを参照されたい。なお、当時のカルカッタとシャンティニケトン間は、しばしば電報が用いられ、1 日で伝文することができた。
- ²¹ Shantiniketane Dan Khata, p. 205, and Gari Palki Bhara Khata, p. 224, *Sarkari Kyasher Khatiyani Bahi*, 1308, S.N 129, Rabindra Bhavana, Visva-Bhartari, Santiniketan.
- ²² この点について、唯一、[Prasant Pal 1990: 58] は、これが岡倉天心であると指摘しているが、その具体的な裏付けは示されていない。そのため、たとえば先述のタゴール国際大学のショウメンドロナト・ボンドパッタエ教授は、シャンティニケトン側での天心の来訪の記録が残されていないことから、この記事については、費用は計上されたが、実際には使用されなかったものと説明する（2010 年12 月の筆者とのインタビューから）。タゴール国際大学・タゴール研究所 (Rabindra-Bhavana) のニランジョン・パネルジーも、天心が来訪していれば、必ずシャンティニケトン側にその記録が残されるはずなので、その可能性は疑わしいと指摘する（2010 年12 月の筆者とのインタビューから）。そのため、註15 でも指摘したように、これまでのタゴールの伝記的研究では、その可能性に言及するものが見られなかったものと考えられる。

- ²³ この時に天心は、4月2日に日本からカルカッタに到着した浄土真宗の僧侶・織田得能をともなって旅行に出ているので、「2名の日本人」という記録に対応する。また、その後、カルカッタに戻った2名の日本人は、ニベディタの案内で、タゴール家の家長であるモホリシ・デベンドロナトとの面会も果たしている。
- ²⁴ Nababarsa, *Bharatbarsa*, RR. Vol. 4, pp. 367-377. 日付は、1902年4月14日。
- ²⁵ シャンティニケトンにおける初期の西洋人協力者として有名なC・F・アンドリュースやW・W・ピアソンが、初めて学園を訪れたのは、1912年11月のことである。英領インド政庁の監視下におかれていたシャンティニケトンに、政府の官吏が正式に訪問するのは、1915年3月のカール・マイケル卿が初めてであった。

参考文献

- Advaita Ashrama, 1948-97, *The Complete Works of Swami Vivekananda*, (CWSV), Vol. 1-9.
- Animananda, Brahmachari Rewachand, 1940, *The Blade, Life and Work of Brahmandhab Upadhyay*, Calcutta: Roy & Son.
- Azuma, Kzuo, (Translation), 1996, *Shitoku Horir Dinpanji*, Santiniketan: Visva-Bharati University. (Bengali)
- Banerjee, Nilanjan, 2003, *Naughty and the Lotus Heart: The Okakura-Priyambada Correspondence*, Reitaku Journal of Interdisciplinary Studies, Reitaku University, Vol. II, No. 2, September.
- Basu, Sankari Prasad, 1968-1994, *Nibedita Loknata*, (NLM), Vol. 1-4. Ananda Pabliishshars. (Bengali)
- Basu, Sankari Prasad (ed.), 1982, *Letters of Sister Nivedita*, Vol. I, Calcutta: Nababharat Publishers.
- Bharucha, Rustom, 2006, *Another Asia: Rabindranath Tagore & Okakura Tenshin*, New Delhi: Oxford University Press.
- Datta, Krsihna and Robinson, Andrew, 1995, *Rabindranath Tagore: The Myriad-Minded Man*, Bloomsbury Publishing.
- The Eastern and Western Disciples, 1912-2001, *The Life of Swami Vivekananda*, Vol. 1-2.
- Gandhi, M. K., 1966, *An autobiography: or, The story of my experiments with truth*; translated from the original in Gujarati by Mahadev Desai, Ahmadabad: Navajivan.
- Ghosh, Nareshcandra, 1989, *Smritit Aloye Swamiji*, pp. 268-286, Swami Purnatmananda (ed.), Kolkata: Udbodhan Ashram. (Bengali)
- Horioka, Yasuko, 1963, *The life of Kakuzō, Author of the Book of Tea*, Tokyo: Hokuseido Press.
- Kowshik, Dinkar, 2011, *Okakura, The Rising Sun of Japanese Renaissance*, 2nd edition. New Delhi: National Book Trust.
- Kripalani, Krishna, 1962, *Rabindranath Tagore: A Biography*, Oxford University Press:
- Mukhopaddhayay, Prabhathkumar, 1933-64, *Rabindrajibani: 1961-1941*, Vol. 1-4, Santiniketan: Visva-Bharati. (Bengali)
- Pal, Prasant Kumar, 1982-2003, *Rabijibani: 1861-1926*, Vol.1-9, Kolkata: Ananda Publication. (Bengali)
- Tagore, Abanindranath, 1961, *Reminiscences*, *The Journal of the Indian Society of Oriental Art*, November, pp. 43-45.

- Tagore, Rathindranath, 1958, Early Days at Santiniketan, in *On the Edges of Time*, pp. 48-60. Calcutta: Orient Longmans Pvt.
- Tagore, Surendranath, 1936, Some Reminiscences, *The Visva-Bharati Quartely*, Vol. II, Part. II, August.
- Thakur, Rabindranath, 1939-1982, *Rabindra-Racanābali*, (RR), Vol. 1-30, Santiniketan: Visva-Bharati University, 1942-2004, *Cithipatra*, Vol. 1-19, Santiniketan: Visva-Bharati University. (Bengali)
- Thakur, Rathindranath, 1966, Santiniketan Brahmacharyyashram, in *Pitrismruti*, pp. 53-61. Kalikata: Jigyasa Publications. (Bengali)
- 我妻和男、1981、『人類の知的遺産61 タゴール』、講談社。
- 我妻和男、2006、『タゴール—詩・思想・生涯—』、麗澤大学出版会。
- 稲賀繁美、2002、『岡倉天心とインド—越境する近代国民意識と汎アジア・イデオロギーの帰趨—』、モダニズム研究会(編)『越境する想像力』、人文書院、76-102 頁。
- 稲賀繁美、2005、『シスター・ニヴェディタと岡倉天心における越境と混淆『母なるカーリー』、『インド生活の経緯』と美術批評の周辺—天心滞インド期の著作へのあらたな洞察—』、井波律子・井上章一(編)『表現における越境と混淆』、国際日本文化研究センター。
- 岡倉登志、2006、『世界史の中の日本—岡倉天心とその時代—』、明石書店。
- 岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二、2013、『岡倉天心・思想と行動』、吉川弘文館。
- 岡倉天心、1979-1981、『岡倉天心全集』全9 巻、平凡社。
- 岡本佳子、2008、『ラビンドラナート・タゴールと岡倉寛三(天心)—ナショナリズムをめぐる—』、『アジア文化研究』(別冊17)、49-75 頁。
- 春日井真也、1971、『インドと日本四—堀至徳の思想と生涯一—』、『佛教大学研究紀要』、55。
- 春日井真也、1972、『インドと日本五—堀至徳の思想と生涯二—』、『佛教大学研究紀要』、56。
- 春日井真也、1981、『岡倉天心の果たした役割』『インド—近景と遠景—』、同朋舎出版、121-160 頁。
- ラビンドラナート・タゴール、1981-1993、『タゴール著作集』、全12 巻、第三文明社。
- 丹羽京子、2011、『タゴール (Century Books 人と思想)』、清水書院。
- ボンドパグダエ・ショウメンドロナト、我妻和男・白田雅之・西岡直樹(共訳)、1988、『タゴールの絵について』、第三文明社。(Rabindra-Citrakala: Rabindra Sahityer Patabhumika)
- 野間亜太子、1983、『岡倉天心とタゴール』、『季刊詩誌・地球』、88-91 頁。
- 堀岡弥寿子、1974、『岡倉天心—アジア文化宣揚の先駆者—』、吉川弘文館。
- 堀岡弥寿子、1982、『岡倉天心考』、吉川弘文館。
- 森本達雄、1993、『タゴールと岡倉天心』、『タゴール著作集・別巻』、186-205 頁。

とがわ まさひこ ●広島大学大学院開発協力研究科